
魔法少女リリカルなのは Bond connecting the key 第一種世界編

駄句屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Bond connecting
the key 第一種世界編

【Nコード】

N1258V

【作者名】

駄句屋

【あらすじ】

JS事件から2年。世界の異変から始まり、薙が失踪。なのはたちは薙を探すため、世界を回った。そこで、薙がこの世界の現象と関わりがあることに気づく。そして、なのはたちは世界の異変を解決するため、薙と協力をしようとするが、薙は拒み、刃を向けた。なのはたちも、この現象を解決する方法のために、再び薙の搜索を開始する。数々の世界で、出会いと別れを繰り返し、この世界の真実を知ったとき、なのはたちは、どうするのか？

『魔法少女リリカルなのは Bond connecting the key』の続編である今作。楽しんでいただけるよう頑張ります。

原作、キーワードは話が進むにつれ増えていたりします。

第1話 あの後（前書き）

雑VSなのは。勝者はどちらだ？

第1話 あの後

白い空間——自分以外他に何も存在しない場所になのはは立っていた。辺りを見回しても、誰もいない。気配も感じなかった。

（ここは……？）

ここにいる前の記憶がない。なぜここにいるのか……どうやって来たのか、わからなかった。とにかく動いてみようと、一歩足を踏み出した。

——ドスッ

「え……？」

鈍い音が聞こえたかと思うと、足が動かなくなった——否、目に入った光景に、理解できずに止まってしまったのだ。なのは目の前には、腕が一本あった。問題は、その腕がどこから現れたのか。なのははおそろおそろ視線を下げていく。腹部に視線が付いた瞬間、なのはは目を見開いた。腕は、なのはの腹を貫いていた。腕は血で真っ赤に染まり、なのはの腹からは、血が滴り落ちていた。

「大丈夫……」

次の瞬間、声が聞こえる。場所はなのはの背後……つまり、この腕の持ち主。

「痛みなんてない……そんなもの、感じることはないんだ……」

確かになのはに痛みはなかった。だが、だからこそ恐怖した。しつかりと貫かれた自分の身体……にもかかわらず、痛みを感じない。これではまるで……。

「だって……お前は……」

なのはは恐怖を振り払うように、首を動かし、背後の人物を見た。そこにいたのは、不敵に笑う薙だった。

「なのは……!」

「はぁ……はぁ……」

次の瞬間、なのはの視界は全くの別物になっていた。白一色だった視界は開け、代わりに蛍光灯の眩しい光と、心配そうになのはを見下ろすフェイトの顔だった。

「大丈夫？ 急にうなされたから……」

「ゆ……め……?」

少しずつ、頭がはつきりしてくる。そして思い出した。なぜここにいるのか。

「私……負けちゃったんだ……」

「……」

黙った、つまり肯定していた。

「その……なのは、聞いても大丈夫？ あの後、何があったのか」

「うん……」

なのはと薙は、互いに収束攻撃を構え、同時に放った。

「なんてな……」

「なっ……」

だが、攻撃はどちらも放たれることはなかった。なぜなら、レイジングハートを掲げたなのは左腕を、さっきまで地上にいたはずの薙がつかんでいたからだった。なのはは慌てて視線を下に向ける。薙の用意した霊力の塊は、いまだそこにとどまっていた。

「どうやって!？」

「これがこの攻撃の本当の姿だから……」

そう言うと、薙は素早くなのはの腕をひねり上げ、抑えた。そして、右腕を掲げた。その手の中には、白と黒のカートリッジが5つずつ。それを握りつぶし、灰色の塊を作り上げる。

「あ……」

「詰めが甘いぜ? 覇動……『爆碎掌』!!!」

「きやああああああ!!」

なのはは背中に爆碎掌を受けただけではなく、そのまま自らの集めた魔力を前面に受けた。しばらくして、前後からの強力な奔流から解放され、なんとか意識の残っていたのはだったが、次に目に入った光景を見て、絶望した。目の前には、スターライトほどの大きさは無い——だが、『圧縮』によってそんなことは関係ないほどの威力を誇る、霊力の塊だった。その塊に接触した瞬間、なのはは

意識を失った。

「……」
「……」

話し終えたなのはも、それを聞いたフェイトも言葉を失っていた。無慈悲な攻撃。あの薙が、なのはに対し、ここまでやったということに、何も言えずにいた。

「あ……ところで、フェイトちゃんたちはどこにいたの？」

気持ちを切り替えるために、なのはは別の話題を振った。フェイトも暗い表情をなんとか引っ込め、その話に乗る。

「あの結界の外……嚴重に張ってあって、通信ができなかったみたい」

それを聞いて、なのはは胸をなで下ろした。そして、もうひとつ気になることを聞いてみる。

「あの監視者って？」

「あ、あれはね……」

「薙！？」

なのはとの戦いが終わると、結界が解け、その外にいた全員が、巨大なクレーターの真ん中に、バリアジャケットもレイジングハートもボロボロになったのはと、なのはを組み伏せている薙の姿を

発見し、怒りと戸惑いを見せた。

「ずいぶんとお早い到着で……」

「あんた……なんて事したのよ!!!?」

「さすがにやりすぎだ……」

怒りを薙に向ける一同だが、薙は気にもとめず、ただ空を見上げるだけだった。

「へっ……あたしらなんて、見なくても倒せるってか？ 甘く見られたもんだぜ!」

「いつまでも、やられっぱなしじゃありません!」

「はぁ……」

薙はため息をつくと、おもむろに飛び上がる。フェイトたちはいっそう気を引き締め、薙を見る。

「悪いけど、これ以上お前たちの相手はしない。時間の無駄」

「なに?」

「俺にはしなくちゃいけないことがある。あいつらが動き出しちまったからな」

「あいつら?」

誰のことを言っているのか聞こうとするのを遮るように、薙は指さした。その先には、さっきまで光の塊だった三つの光が、人の形になっていた。その姿は、多少の違いはあるが、十年前のなのはたちだった。そして、三人はそのまま何処かへと飛んでいったのだ。

「あれは?」

「あれが監視者——そうだな……マテリアルとでも言おうか」

「マテリアル？」

「そ……じゃ、俺はもう行く。一応言つといてやる……これ以上首を突っ込むなら、お前らもあいつと同じだ……覚悟してこいよ？」

そう言つて、薙はそのまま転移していった。

「……マテリアル……私たちの身体が光ってたから、私たちの姿なのかな？」

「でも、昔の姿だし……完全に一緒ってわけでもないし……」

結論は、今は何も分からないということだけだった。

「お話中、失礼しますね」

「シャルマルさん」

医務室の扉が開くと、そこにシャルマルとヴィータ、土がいた。

「よかった、元気そうね」

「はい。なんとか……」

苦笑してそう答えるなのは。あれだけの攻撃を受けて、精神的に参ってはいるが、身体は寝起きでだるい程度だった。

「しっかし驚いた。見つけたとき真っ赤だったんだぜ？」

「真っ赤？」

「実はね……」

実は、なのはは発見当時、バリアジャケットの背中部分全てを覆

うほどの血が付着している状態で発見された。その姿を見て、ヴィータは危つく手が付けられなくなる寸前だった。

「でも……特になんともないよ?」

そう言いながら、軽く上半身を動かしてみるが、特に違和感はないかった。

「それはそうよ。だって……」

そこまで言って、シャルは言いにくそうになる。

「何?」

「……なのはちゃんの背中に付着していた血ね……なのはちゃんのじゃないの」

「え?」

「それって……」

「うん……調べてみてね……この血は、薙くんのだったの」

「薙の?」

「そう」

「つまりあいつ、なんのつもりかわかんねえけど、なのはを気絶だけさせたみたいだ」

「なんで……?」

「わからないけど、ただひとつ言えることは、これで薙くんはしばらく動けないわ。これだけの出血だもの、痛みは相当なものだし……無理に動かそうとすれば、二度と使い物にならなくなるし……」

「やるべきことがあるみたいだし、利き腕を失うようなことはもうしないだろうな」

「つーわけでだ。八神はしばらく、全員に休暇を言い渡した。三日間だ。少なくとも、お前のデバイスの破損がひどいらしくて修理も

それくらいかかる。俺もしばらく写真館に戻る。もしかしたら、そのまま別の世界に行ってるかも知れんがな」

「とにかくなのは身体を休めることだけを考えな。薙のこと考えんのは、そのあとでいいだろ？」

そう言って、ヴィータ、士は部屋を出ていった。

「私も、一度部屋に戻るね。シャマル、あとはお願い」

「はい」

「それじゃなのは、また」

「うん」

フェイトも部屋を出ていき、シャマルは机で仕事にかかった。休暇前の締めだ。なのははその様子を見ると、もう少し寝ようと、もう一度目を閉じた。

六課隊舎の司令室。ここでも、休暇前に出来ることをぎりぎりまでしようと、フルで動いていた。その過程で、いくつかの世界で、異変が起きていることに気づいた。それは、世界がいくつかのグループにくくられているということだった。

「ライダーの世界が三つずつと、未確認世界でグループ分けか……」

「一体、なんなんでしょうかね？」

「さあねえ……スカリエッティの話じゃ、このミッドに一番近いグループ以外の世界は、強力な結界が張られて、様子を確認することもできひんらしいし……」

「そして、行ける世界もその中でひとつだけ……まるで、誰かにここに行けって言われてるみたいですよ」

「ほんとにな〜……」

それからしばらく、はやては悩んだが、結局何も思いつかず、進展もなかった。

「ぐっ……ってえ……」

薄暗い部屋で、薙は右腕をかばうように座り込んだ。なのはへと打ち込んだ爆砕掌は、華音を使って、威力の全てを自分へと向けた。どれだけ覚悟を決めても、結局非情になりきれず、最後の最後でなのはを傷つけることをやめた。だが、それは結果的にいい方へと向かった。なのはに付着した薙の血は、あたかもなのはに大怪我をさせたようにその場の全員の視線を集め、なのはの治療を優先させた。

「しかも……『調律者』のじゃ、どうにもできなかったし……」

目的のものである『鍵』を手に入れ、扉を開いた薙だったが、所詮は『欠片』。次の世界への扉を開いたに過ぎなかった。

「……考えても仕方ねえ。那美たちは地球とサイスに閉じ込められたいし、しばらくは一人か……」

「いいや。どうやら僕の世界は、このグループになったようだよ」

「おう。久しぶりだな」

突然聞こえてきた声に、薙は驚くこともなく答えた。視線は向けない。誰かは分かっているからだ。少し幼さの残る男の声は、黙々と現状を話し出す。

「こっちに変化はない。だが、もうすぐ彼らをあっちへ送ろうと思う」

「もうそんな時期か……」

「ああ……この世界とあの世界。そして、すべての世界を救うために……ね……」

「そして、全てを救ったあとには……」

「分かっているさ……」

声がだんだん小さくなる——男が自分の世界へ戻ろうとしているのだ。

「その時は、僕も消えるよ……」

第1話 あの後（後書き）

雑の前に現れた男は一体？ すべてが終わったとき、消えるとは？

次回 第2話 『始まりはこの場所、この時間』

最初はやっぱりこの世界…… 『魔法少女リリカルなのは』 始まります。

第2話 始まりはこの場所、この時間（前書き）

雑となのはの戦いから3日……いよいよ互いに行動開始！

第2話 始まりはこの場所、この時間

「みんな、おはよう」

「おはようございます!」

「さあ、この3日の休暇で、コンディションはバッチリだな」

六課隊舎のミーティングルームで、はやてはメンバーを鼓舞する。快復したなのははじめとした隊長たち。FWメンバー。新たに加わったスカリエッティとナンバーズ。全員、やる気に満ちていた。

「じゃあまず、朝一でスカリエッティが調査した結果やけど……現在、複数の世界が、まるでグループを作っているかのように特殊な結界で覆われてる。この結界やけど、魔力的なものでも、霊力的なものでもないため、今の段階では解除ができません……もちろん、連絡や転移もできん状態や」

「よろしいですか?」

「なに?」

「ほかの世界の様子はどうなっているのですか?」

「それだが……分かっているのは、ひとつの世界だけなんだ」

「どういうこと?」

「グループ分けされた結界とは別に、世界一つ一つにも結界が張られている。だが3日前、彼との戦いの後に、ひとつだけ結界が解除された」

「つまり、その突然解除された世界以外は結局わからないってこと?」

「そういうことだ。ただ、ライダーの世界は観測していたから、どこのグループに入ったのかはわかる」

「ちなみに、このグループになったんは『ブレイド』、『響鬼』、『カブト』や」

「あと、残念なお知らせがあります」
「残念なお知らせ？」

場違いな明るい声——クアットロの一言で、全員の視線が彼女に集まる。

「私たちのいるグループですが、このライダーの世界、ミッド以外にあと3つあります」

「……3つ？」

「はい。それもすべて未確認世界。内ひとつは地球じゃありません」
「ちょ、ちよつとクア姉？」

「なに？」

「あたしら、全部の世界を回ったんじゃないかったんスか？」

「そのはずだったんだけどね……」

「実は……私たちが難にいと会っている間に、また世界が増えたんですよ……」

「……ちなみに、その3つだけですか？」

期待を込めて聞いたスバル。だが、顔は嫌な予感がするというような表情で、結論から言えば、その予感の的中していた。

「だから残念なお知らせなの。軽く10は増えたわよ……この様子なら、まだ増えるんじゃないかしら……」
「……」

この場から、言葉が消えた。そして、全員が全く同じことを考えたのは、言うまでもない。

「えっと……話を戻すな？ 分かっているこの世界……嬉しいことに、地球やった……んやけど……」

「どうかしたか？」

「まあ、口で説明するより、見てもらったほうが早いね。ウーノ」
「はい」

ウーノがモニターを開く。そこに映っていたのは、海鳴市のある喫茶店。

「あ、『翠屋』……」
「でも……」

かすかな違和感……それは、喫茶翠屋を見たことのあるメンバー全員が感じていた。特に、なのはに関しては違和感しかない。

「少し……綺麗？」

運営している高町家の手により、翠屋は常に清潔を保っている。そうではなく、年月がかかることで起こる、老朽化による変化。それが、この翠屋には見当たらないのだ。

「その答えは、この世界は、今から約10年前だからだよ」
「え？」

モニターが変わり、今度は高町家が映し出される。そこから出てくる少女。

「なのはさんだ」

映っていたのは、幼い日のなのは。聖祥大附属小学校の制服を来ている。

「確かに日付的に見ても、彼女の姿を見ても、過去のものだと思うのだけど、ずいぶん違う部分があってね……」

「なんなんですか？」

「地球は、魔法とは縁遠い世界……にもかかわらず、この世界には大量の魔力が観測されている」

「ありえへんことなんよ……こんなこと……」

「少し不安になるよ……これからのことを考えると……」

そんな何気ないスカリエッティの一言は、これからのことに関わったメンバーの表情を暗くさせてしまった。だけど、そんなことをしている場合じゃないから、全員すぐに引き締める。

「そういうわけで、これから現地に行ってもらわねえけど、今回は回復したばかりで申し訳ないんやけど、なのはちゃん、フェイトちゃん、チンクの3人で行ってもらう」

「えー！ あたしら留守番っすか？」

「あまり大人数で行っても、身動きができないからね」

「しかし、この2人でいいのか？ たしか、タイムパラドックス……という現象が起こるのでは……」

「デンライナーの時のだね。過去の自分に会わなければ大丈夫だよ。それと、おそらく大丈夫だろう……ここは過去の世界であって、君たちの過去ではないようだし……」

「可能性の話やから、なるべく過去のなのはちゃんたちには接触しない方向で」

「分かった」

「それじゃあ、3人は準備が出来次第、現地へ向かってな」

3人は頷くと、ミーティングルームを後にした。

一方その頃、薙はというと……。

「だりいゝ……」

3日ぶりに目を覚ました薙は、ものの見事に全身をダルさが襲うというスペシャルタイムに突入していた。毎日の日課だった習慣は、なのはとの戦いからの3日間を寝て過ごしたことで、今の状態になっていた。何事も積み重ねであり、一日怠ると、取り戻すのに3日かかるという……。ある程度は昔の薬物投与の影響で筋肉の低下は抑えられるが、気だるさはどうにもできなかった。

「だめだ……なんもする気にならない……」

「呑気なものだね……」

「これから忙しくなるんだ……目が覚めなかったってことは、なのはたちはまだ動いていないってこと……さすがにそろそろ動き出さるうよ」

「だろっね……」

「で、どうした？」

音も無く現れた存在に、特に驚くこともなく受け答えをする。薙は身体を起こし、その存在に向き直る。

「こっちは事態が動くのにもう少しかかる。あまり悠長なことは言ってもらえないけど、ことを早めるのは、『調律者』として、やってはいけないことだから」

「だわな……」

「そういうわけだから、こっちの事態が動くようなら、なにか手伝おうと思ってね」

「おおゝ。そいつは助かるゝ」

薙はこの『調律者』を全面的に信用していた。だからこの提案は、かなりありがたいものだった。

「この世界が、妙な状態にあるのはわかってるよな？」

「ああ。僕の世界も、似たようなものだからね」

「で、目的の物を手に入れる——というか出現させるには、『分岐点』で大きな変化を促す必要があるわけだ」

「じゃあ？」

「ん。この世界の根本を抑える」

「分かった。何をすればいい？」

「えっと……」

薙はベッドの脇に備え付けている机から、メモとペンを取り出すと、そこに何かを書いていく。ちなみに、ここは神乃神社ではなく、薙のとある能力によって用意された、この世界の住処である。

「ほい」

「ここに？」

「ああ……俺が知ってるのはそれだけだ……」

「全部でいくつあるんだい？」

「21」

「随分とあるね……」

「ほんと……」

「とにかく、僕はここに向かえばいいんだね？」

「そういうこと」

「分かった。さっそく向かうよ」

「頼んだ」

『調律者』は薙に背を向け、歩きだした。と、扉の前で振り返っ

た。

「しかし……運命を守るために、変化を促す……か……」
「ん？」

「なんだか、矛盾しているなと思ってね……」

「そんなことが……」

「そうだろう？」

「違うね……俺のやろうとしているこれこそ、本当の意味で運命を守っているんだ……」

第2話 始まりはこの場所、この時間（後書き）

薙と行動を共にする『調律者』はいつたい誰なのか……薙の言う、
本当の意味とは？

次回 第3話 『意外な乱入者』

薙の行動によって登場したのは、なんと！？

第3話 意外な乱入者（前書き）

新たな物語の幕は開いた。

あとはただ進むだけ！

第3話 意外な乱入者

なのは、フェイト、チンクの3人は昼過ぎに地球へと転移した。

「あまり変わらないな」

「チンクは今の海鳴しか知らないんだったね」

「そうだ」

「よう。待ってたぜ……」

声が聞こえると同時に自分たちを覆う独特の雰囲気——結界の発動に、3人は振り返りながら戦闘態勢に入る。

「ははは。やる気満々かい……」

「誰のせいだど？」

「すんません……」

「……今日はいつも通りだね」

「あゝ……もう始まつちまったからな。いろいろ危惧してたことが全部起きた……もう心配するだけ無駄なんだよ」

「でも、私たちには何も……」

「事務的な確認なら、三日前に済ませている」

「だよね……」

そんな会話をしながら、なのはは薙の右腕を見る。その視線に気づき、薙はアクションで元々付けている包帯を解いて見せた。腕に傷は無く、指も問題なく動かしていた。なのはが安堵したことを確認し、もう一度包帯を巻いていく。

「しかし、そちらから早速おでましか……」

「本当は、もう少し家で寝てるよ……」

「……そういうこと？」
「そういうこと」

言っと、薙のそばに機械のカブトムシが飛んできた。つまり、この薙は未来から来た存在だった。

『だったら、今の薙にいは、この世界でやることは終えてるの？』
「いや。まだまだこれからだな……」

薙の前にモニターが開き、はやてが映る。

「しかし、わざわざ六顆メンバーを再集結させるとはな。スカリエッティまで加えちゃってまあ」

『これでもまだ足りんと思うけどね』

「正しいな。俺ナンバーズ数人、同時に相手して勝ってるから……な」

はやての後ろにいるその『数人』が顔をしかめる。その近くにいるメンバーは、「ああ、彼女なんだ」と思った。

『一応、お仕事やからもう一度確認するで？』

「おう。記録しとけよ？」

『大丈夫』

おおよそ、仕事中の会話ではない。もちろん、全員意識してこんな会話になっている。

『神乃薙……あなたは一体何をやろうとしているんや？』

「『調律者』のしようとした『運命』を、俺の手で守る」

『それは、どういったふうに？ 私たちでは、できひんこと？』

「さあ？」

『さあ……って……』

「可能ではあるだろうよ。ただ、やりきれないな。断言できる」

『つまり……それだけのことを、あなたはしようと？』

「じゃなきゃ、あんなことしないよ……」

『……』

「……」

『……わかりました。あなたがやろうとしていることが、この世界の驚異になる可能性がある以上、これ以上の行為は見過ごせません……おとなしく、我々の保護を……』

H e n s h i n

「い・や・だ」

C a s t O f f ・ C h a n g e B e e t l e

「おまえらさ、やつぱ俺に甘い」

『何を……』

H y p e r C a s t O f f ・ H y p e r C l o c k U

p

「一つ教えといてやろう。この世界は作られた世界。過去の自分に会ったところで、お前たちの過去にも、今にも何ら影響はない。じゃ、そういうことで」

薙はそのままカブトへと変身し、姿を消した。

「行つたね……」

「……」

「チンク？」

「なのは……お前、今日は何をしていた？」

『チンク？』

「今日……たしか、今日の日付って……」

「……」

フェイトのつぶやきに、なのは思い出した。今日、どこで何が起きたのかを……。

「ここって……」

3人がやってきたのは、広大な敷地に生い茂る木々に囲まれた屋敷だった。すなわち……。

「そう。すずかちゃんの家……」

「そっか。今日か……」

「ここで何があつたんだ？」

「この庭で、『ジュエルシード』が一つ、発動する。そして、フェイトちゃんに出会った日なんだ」

「……なるほど」

「時間的に、そろそろだよ……」

そう言つて見下ろした先では、小なのは、すずか、アリサがお茶をしながら話しており、フェイトの視線の先では、小フェイトがある方角を見つめ、チンクの視線の先では、小薙——那岐がふらふら歩いていた。

『イツツアショ~~~~~タ~~~~~イム!!!!』

突如辺に響く声。スピーカーでも使っているのか、大音量だった。3人はたまらず耳を塞ぎ、辺りを見回す。当然、子供たちも耳を塞いでいた。そして、それと同じくして、森の一角から光が溢れる。

「『ジュエルシード』!」
「でも……こんなこと……」

異変に気づいたユーノが、すぐさま結界を張ったことで、それ以上の混乱は起きなかったが、『ジュエルシード』とはまた違う変化に、かなり驚いていた。

「聞いたほうが早いだろうな」
「だね……行こう!」

『ジュエルシード』を発動させた巨大な子猫のそばに、声の主はいた。

「お、来たな……」
「キバット! あなたなにしてるの!?!」

声の主は、仮面ライダーキバの変身ツール、キバット族のキバットバット? 世だった。

「ん? 薙の指示で、ここで大声を出したただけだぜ?」
「薙君の? 彼はここで、何を……」
「これは……」
「な、なに?」

言葉が続けようとしている間に、小なのはが、ユーノと共に現れた。巨大化した子猫にまず驚き、そのそばにいるなのはたちの存在に、2度驚いていた。小フェイトも近くまで来ており、さすがに人数が多いため様子を伺っていた。

「一体なにが……」

「だぁ~~~~~!!」

息つくまもなく、今度は小なのはたちのそばで叫び声が聞こえる。茂みから飛び出してきたのは、肩で息をしている那岐。その後ろから、足音がゆっくりと近づいてきていた。

（来る?!）

この状況で、姿を現していないのは1人。おそらくこの足音の持ち主。

「な……ぎ。……え？」

木々の間から姿を現したのは薙——ではなく、奇抜なメイクにぶかぶかのズボンをサスペンダーで落ちないようにしている、まんまピエロだった。ピエロは辺りを確認すると、両手をポケットに突っ込んだ。そして、四〇元ポケット並みに、どこに入っていたのかと思うほどに大量のボールを、器用に持っていた。

「やば!」

キバットがそそくさと退散していくのを見て、みんな嫌な予感を感じた。ピエロが右足を軸に、回転を始める。

「フェイトちゃん! チンクは一緒に!」

「分かった!」

「任解!」

それぞれ、小なのはとユーノ、小フェイトへ向かい、シールドを張る。チンクは那岐を掻っ攫うと、素早くなのはと合流する。シー

ルドを四重、五重に張ると、ピエロから弾丸が飛んできた。弾丸は次第に数を増やしていき、威力も上がっていく。最初は亀裂が入っていただけだったが、数十発ほどで破壊され、数が減らされていく。ギリギリ、ラスト一枚というところで嵐はやんだ。だが、残ったこの一枚も、亀裂だらけで、あと数発もつかどうかだった。

「待って！」

嵐がやみ、誰もが呆然としている中、小フェイトが飛び出した。向かう先は子猫。ピエロの攻撃は、あの状況で正確になのはただけに向けられ、子猫には一発もあたっていなかった。ただ、大きな音に怯えていた。それを封印しようと、小フェイトは飛び出したのだ。が、回転を止めたピエロが、横から殴りかかり、バルディッシュで受けるも、そのまま弾き飛ばされてしまう。

「……………」

「……邪魔をしないで」

「待って！ それ——『ジュエルシールド』はユーノ君が……………」

ピエロはそんな二人の声には耳を貸さず、子猫へ手をかざした。

「させない！」

「知らん……………」

空いたもう片方の手を小フェイトへ向け、指をクイツと……………フェイトはバインドに捕らえられ、動けなくなる。

「お前らもな」

「！」

「くっ……………」

「ば、バインド!？」

「な、なにこれ!??」

声が聞こえ、ようやく薙と確認できたことに安堵した矢先、なのはたちはバインドに捕らえられる。それぞれが動けなくなったことを確認し、ピエロ——薙は再び子猫へ向き直る。

「大丈夫……もう、怖いことは終わるから……『ジュエルシード』、シリアル『XIV』……封印……」

足元に太極図が展開し、子猫を覆う。子猫は柔らかい光に包まれ、次第に小さく——元の大きさに戻っていく。元に戻った子猫は、薙の腕の中に収まり、気持ちよさそうに眠っていた。

「よし……」

子猫が無事なことを確認すると、薙は2、3枚、緑色の円盤状の物を取り出し、放り投げた。それは変形し、猿のような形になる。

響鬼のサポートメカ緑大猿りよくおおざるに子猫を任せると、全員のバインドを解き、向き直る。

「さて、次々……」

「おう!??」

「あっ!」

素早く那岐を拉致した薙は、ポケットに手を突っ込み、そこからナイフを取り出した。

「これで、終りよ……!!?」

突然、薙が那岐を手放した。次の瞬間、薙のいた場所に、何かを通った。その何かは、息つくまもなく、薙に襲いかかる。ナイフと何かがぶつかる。大きくナイフを振り切ると、何かは薙から距離をとり、その姿を現した。

「つたく……」

薙がボヤキ気味につぶやくと、顔が縦に割れる。カランという音とともに、いつもの薙の顔が露になった。そして、ピエロの仮面を割った人物——良く知った男をみる。男も、改めて薙を確認するため、振り向く。

「そんな棒っ切れで、鉄のお面を割らないでくださいよ……」

男が手に持っていたのは、そこらへんに転がっている棒が二本。それを見て、薙は改めて目の前の男の強さを実感した。なのはたちも、その姿を確認し、呆然としていた。

「う……そ……」

「なんで……あなたが……」

「まさかあなたが出てきますか……高町……恭也さん」

現れたのは、永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀流師範代——なのはの兄、高町恭也その人だった。

第3話 意外な乱入者（後書き）

薙の前に現れたのは、魔法とは関係のないはずの恭也。

彼はなぜここにいる？

次回 第4話 『再戦、殺神VS御神』

決着はいかに！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1258v/>

魔法少女リリカルなのは Bond connecting the key 第一種世界編

2011年10月24日14時04分発行